

日本・新羅の対外関係と東部ユーラシア

—天平四年・六年新羅使を中心として—

谷田 淑子

はじめに

日本古代における対外交流の歴史は、中国や朝鮮半島との交流を基軸として構成される。その交流の担い手は、君主によって派遣される使節だけでなく商人や僧侶などもおり、行き来する文物も実に多様であった。中国から帰国した僧侶による将来目録には彼らが持ち帰った膨大な数の經典が記されているほか、『続日本紀』などの六国史には新羅や渤海からの使節（以下、「新羅使」「渤海使」とする）が贈呈品として珍獣や毛皮や葉草などを持参したことが載っており、海外との交流が日本にとって豊かな文物をもたらす貴重な機会であったことを物語っている。こうした交流によって日本は国内の学問や経済を成長させていっただけでなく、対外的にも国家としての威容を高め、東アジアにおける国際的な地位を確立していった。

東アジアについては、西嶋定生氏が唱えた「東アジア世界」の概念がある¹⁾。この「東アジア世界」とは中国王朝を中心

として東アジアに構成された世界で、地理的には北は朝鮮半島、南はベトナムなどを含み、日本はこの世界の東端に位置している。中国とそれを取り巻く諸勢力は冊封を媒介とした政治的関係を有したほか、文化面でも漢字・儒教・漢訳仏教・律令といった中国由来の要素を共有した。

この東アジア世界において、日本の対外活動はとくに中国および朝鮮半島との関係に終始していた。七世紀前半での日本の外交相手は、中国では隋のち唐があり、朝鮮半島では百済・新羅・高句麗の三国があった。そして天智二年（六六三）の白村江の戦い以後は、唐・新羅・渤海と通交を保つていく。概して日本の活動範囲は東アジア世界の内部におさまっていたことができる。

しかしながら、古代日本の対外関係を理解するためには東アジアの外部にも目を向ける必要がある。

古畑徹氏は一九八六年発表の「唐渤海紛争の展開と国際情勢」において、突厥などの北アジア勢力の台頭が唐・渤海戦争の引き金となったと論じている。^② また近年では菅沼愛語氏が、唐・突厥・吐蕃などの諸勢力の活動が互いに連鎖しあっていることを指摘した。^③ 唐は北方を突厥に、西方を吐蕃に塞がれた状況下で、両者に対して交互に敵対と和睦を繰り返すことで勢力拡張と防衛のバランスを保とうとした。このように、外交や戦争にまつわる原因・背景を解明するためには、その当事者間での事件だけでなく、彼らを取り巻く国際情勢の変化に着目しなければならない。

このような視点に立てば、日本と中国・朝鮮半島との関係もまた、従来考えられていた以上に広域的な国際情勢の影響を受けていた可能性が想定できる。そこで本稿では天平四年（七三二）と天平六年（七三四）に日本に到来したふたつの新羅使を切り口として、日本・新羅の関係と国際情勢との連関性について考察していく。天平四年と六年に來航した新羅使は、到来時期はきわめて近いが、來航してからの日本に対する行動に大きな違いがある。一方の新羅使は日本に対して恭順的な姿勢をとったが、もう一方の新羅使は自らを「王城国」と名乗ったことで、日本との間に緊張関係を引き起こした。わずか二年の間でなぜふたつの新羅使の日本への態度が大きく変容したのかを、当時の国際情勢と比較しながら検証

する。

なお、本稿で取り上げる国際情勢とは、唐との通交がなされていた地域を範囲として、西はチベット高原やタリム盆地まで、北はモンゴル高原までの情勢を指す。前述の東アジアだけでなく突厥・吐蕃などが居していた北アジアや中央アジアを含むこれらの地域を、以下「東部ユーラシア」とする¹⁾。

一 天平四年および天平六年来航の新羅使

(一) 天平四年(七三三)新羅使と「年期奏請」

本稿で取り上げるのは聖武朝の日本に天平四年(七三三)および天平六年(七三四)に来航した新羅使の事例である(以下、「天平四年新羅使」「天平六年新羅使」とする)。天平四年は新羅では聖徳王三二年、唐暦では玄宗の開元二〇年にあたる。

まずは天平四年新羅使について『続日本紀』に沿って概要を述べる。

新羅使が日本に来着したのは天平四年正月である。大宰府に数か月間とどめ置かれたのち、五月に金長孫ら四〇人が入京する。新羅使は財物や珍獣を進呈するとともに、朝廷に対して「来航の年期を奏請」した。二日後、朝廷は三年に一度の来航を許可している。

■ 天平四年五月庚申(一九日)条

金長孫等拜朝。進^二種種財物并鸚鵡一口、鴈^一一口、蜀狗一口、狢犬一口、驢^二頭、騾^二頭。仍奏^三請来航年期^一。

■ 天平四年五月壬戌(二一日)条

饗^二金長孫等於朝堂。詔、来航之期、許以^三三年一度。宴訖、賜^二新羅王并使人等禄^一各有^レ差。

日本と新羅の外交史上、新羅が日本に対して使節来航の年限を諮問したことが確認できるのはこの一例のみである。このいわゆる「年期奏請」を行った新羅側の意図については従来ふたつの見解が提示されてきた。早くは坂本太郎氏が、新羅は頻繁な「朝貢」（日本は新羅使を蕃客として扱っていた）による負担を忌避し、より年を隔てた来航を日本に認めさせるために年期奏請を行ったのだと指摘した⁵⁾。近年では濱田耕策氏も同じ立場から日羅関係を述べている⁶⁾。この場合、年期奏請は新羅の自立的な外交姿勢の表れであり、「朝貢」ではないより対等な関係づくりを志向していたと考えられる。一方で鈴木靖民氏、石井正敏氏、森公章氏らは年期奏請とは臣下から君主へ行うものであるとし、新羅は自ら「朝貢」の姿勢を強調することで日本の歛心を買って関係改善を図ろうとしたと考察している⁷⁾。

ふたつの見解のどちらに基づくかで、天平四年の新羅使像は全く異なってくる。しかしながら本稿では、これから述べる根拠に基づき、新羅は日本との関係改善を図ろうという積極的意図から年期奏請を行ったものと考ええる。

第一に根拠として挙げるのが、八世紀末に渤海が日本に年期奏請を行った際の記録である。この史料には年期奏請を受けた際の日本側の反応が記されている。

■『類聚国史』延暦一五年（七九六）十月壬申条

先是、渤海国王所^レ上書疏、体無^三定例^一、詞多^三不遜^一。今所^レ上之啓、首尾不^レ失^レ礼、誠款見^三乎詞^一。群臣上表奉^レ賀曰、「臣神等言、「中略」伏見^三彼国所^レ上啓^一、辞義温恭、情体可^レ観、「中略」克^レ己改^レ過、始請^三朝貢之年限^一、「後略」。

当時、日本の朝廷は渤海を日本より下位の立場の国であると認識しており、その渤海からの国書について「体に定例なく、詞に不遜多し」という不満を抱いていた。しかし延暦一五年に届いた国書は一転して恭順的であった。大納言の神王らは、「渤海はこれまでの過ちをようやく悔い改め、初めて朝貢の年限を奏請してきたのだ」と述べている。もしも年期奏請が朝貢の頻度を減らしたいという消極的な要求であったならば、神王の奏上している文脈と噛み合わない。また、こ

のように外交上の出来事が慶事として取り上げられて群臣から天皇へ上表されること自体がまれであり、このときの年期奏請が当時の朝廷を満足させたことが伝わってくる。

第二に中国の礼制上、年期制の来航を提案するという行為自体が「朝貢」の肯定を意味していた。換言すれば「新羅は日本に従属する立場である」と表明する行為であった。以下に根拠となる『令集解』の記述を挙げる。

■『令集解』職員令二 太政官条 「彈正礼不当者、兼得彈之」項 古記

古記云、〔中略〕朝聘者、經_レ六歲_レ聘_レ一年也。問、聘_レ三年也、六會_レ六年也、十二明_レ十二年誓也。師說、諸侯三年一度、謂_レ之朝也。一年一度遣_レ使、謂_レ之聘。〔私案、朝聘以下、可_レ在_レ治部省。〕。

■『令集解』職員令一六 治部省条 「及諸蕃朝聘」項

謂、国君自来曰_レ朝、使_レ卿大夫曰_レ聘。釈云、礼記王制篇云、諸侯之於_レ天子也、比年一小聘、三年一大聘、五年一朝。注云、比年毎年也。小聘使_レ大夫、大聘使_レ卿、朝則君自行也。〔後略〕

『令集解』では朝聘の定義について注釈を加えている。これによると、中国礼制上で「朝」と「聘」はいずれも臣下が君主のもとへ赴くことを指す語であり、臣下（史料中の「諸侯」「国君」）が自ら赴くのが「朝」で、代理人（「使」「卿・大夫」）を派遣するのが「聘」であるという。日本での用例としては新羅使・渤海使などの来航を指して用いられ、隼人や蝦夷のような国内の服属民に対しては用いられない⁸⁾。なお、朝聘すべき頻度について「古記」は一・三・六・一二年おきの周期であるとし、「令釈」は『礼記』王制篇を引用して一・三・五年おきの周期としている。これは新羅使に対して日本側が許可した三年一度という周期とも符合している。

「諸蕃朝聘」や「諸侯之於天子」などの語からも明らかであるように、中国礼制における朝聘規定は君臣関係を前提としている。君臣間の上下関係があるからこそ君主が臣下に対して来航年限を命じて秩序とするのであり、互いに同等の立場であれば年期を定める必要はない。すなわち新羅が日本に対して行った年期奏請は二国間の君臣関係を肯定する行為で

あったと考えられる。また石井正敏氏は、尋ねる諸侯と裁定する天子という関係を想起させるという点でも年期奏請は日本を喜ばせるものであったと言及している。⁹⁾河内春人氏も外交における年期制の意義について論じる中で、年期奏請が日本への恭順を示す行為であったという立場を取っている。¹⁰⁾

以上のことから、天平四年新羅使は「朝貢」の姿勢を前面に打ち出すことで日本との緊密な関係づくりを進めようとしていたと結論付ける。それではなぜ日本との関係改善を図ったのかという点について論証を進める前に、二年後に来航する天平六年新羅使についても言及する必要がある。なぜならば天平四年新羅使と天平六年新羅使との間の連続性（もしくは断絶性）を考慮することで、当時の日羅関係をさらに正しく理解することができるからである。

(二) 天平六年(七三四) 新羅使と「王城国」

『続日本紀』によると、天平六年新羅使は二月に大宰府に到着し、翌年天平七年(七三五)に金相貞らが入京した。大宰府到着のち入京するという流れは天平四年新羅使と同じである。しかし、入京後の朝廷とのやり取りで問題が起きた。

■天平七(七三五)年二月癸卯(一七日)条

新羅使金相貞等入京。

■天平七年二月癸丑(二七日)条

遣^二中納言正三位多治比真人^一守於兵部曹司、問^三新羅使人朝之旨、而新羅国^二輒改^一本号^二曰^一王城国。因^レ玆返^三却^一其^二使^一。

来航の目的を問われた新羅使は、新羅が国号を「王城国」と改めたことを朝廷に表明した。朝廷はこの改号を臣下らからぬ行動として問題視し、新羅使に帰国を命じた。年期奏請がなされた天平四年とは打って変わり、日本と新羅の関係に緊張が生じている。

両国の摩擦を物語るのほこれだけではない。二年後の天平八年（七三六）に阿部朝臣繼麻呂を大使とする遣新羅使一行が新羅へ出発したが、翌年帰国した彼らがもたらした報告は以下のとおりであった。

■天平九年（七三七）二月己未（二五日）条

遣新羅使奏、「新羅国失_三常礼、不_レ受_二使旨_一」。於是召_三五位已上并六位已下官人物卅五人于内裏、令_レ陳_三意見_一。阿部繼麻呂らは新羅から「常礼を失した」待遇を受けたため、使節の任務を果たせないまま帰国したという。この報告を受けた朝廷では、官人らによる討論がなされた。討論では「遣_レ使問_三其由_一」や「発_レ兵加_三征伐_一」といった意見が奏上されたほか、伊勢神宮・大神（三輪）社・筑紫住吉社・宇佐八幡宮・香椎宮の五社に遣使奉幣がなされ、新羅の無礼が諸社に報告された。奉幣先の多くが外交の玄関口である筑紫の諸社（住吉社・宇佐八幡宮・香椎宮）から選ばれているだけでなく、住吉社と大和国の大神社は神功皇后の新羅遠征伝承にゆかりがあり、香椎宮は仲哀天皇と神功皇后を祭神とする。このように、諸社への奉幣は新羅征討への強い意欲を示すものであった。

以上のように、天平四年新羅使が年期奏請願を通じて日本への接近を図ったのとは一転して、天平六年新羅使および天平九年帰国の遣新羅使では日本と新羅の対立が顕在化している。

（三） 先行研究の再検討 —渤海が日羅関係に与えた影響について—

本稿における大きなテーマのひとつが、なぜ天平四年と天平六年以降とで新羅の態度が一変するのかという問題の解明である。

新羅使が日本に来航した頻度は、七世紀後半では一〜二年おきだが、八世紀前半には三〜五年おきの来航になっている。来航頻度が低下するだけでなく、八世紀半ばからは天平六年の「王城国」事件をはじめとして、天平一五年（七四三）・天平宝字四年（七六〇）・天平宝字七年（七六三）・神護景雲三年（七六九）・宝亀五年（七七四）の六例で日本が新

羅使の命令違反や違例を問責しており、両国の摩擦が顕在化してくる。

従来¹⁴の通説では、日本と新羅の関係を左右した主な要因として、内政面では政治・経済の発展および華夷思想の形成が酒寄雅志氏によって指摘されてきた。政治・経済が発展し、文化的にも成長を遂げた日本と新羅はそれぞれ自国を頂点とする華夷思想を形成していき、「朝貢」を要求する日本の外交姿勢に対して新羅が拒否反応を示すようになったのである。

一方、外交上で大きな影響を与えたとされるのが、同時期に勃発した唐・渤海戦争である。当時の新羅は隣国の渤海と緊張関係にあり、もしも日本が渤海に与すれば、新羅は日本と渤海に挟撃される恐れがあった。また、日本との関係を良好に保つことは交易による潤沢な経済利益を確保することにも繋がっていた。こうした安全保障や交易促進という要因についても従来から広く論じられてきた。¹⁵

安全保障という観点から、改めて日羅関係に対する渤海の影響力を見てみる。渤海は六九八年に中国東北地方に勃興し、やがてその領域は朝鮮半島北部からシベリア沿岸地方にまで及び、「海東の盛国」と称されるほどの繁栄を誇るに至った。¹⁶建国当初は突厥と通交しており唐との国交はなかったが、七一三年に唐から渤海郡王として冊命されたのちは毎年唐へ朝貢するようになり、唐との関係を深めていく。渤海と日本との通交は神亀四年（七二七）に始まるが、その動機は新羅への対抗にあったとされる。渤海が勢力を拡大するにつれ、新羅と渤海との緊張は強まっていった。新羅が渤海を警戒と畏怖の対象として見ていたことは、李成市氏が『新唐書』新羅伝所載「長人」記事に関する考察で指摘している。¹⁸

また、新羅が渤海対策に乗り出していったことは、『三国史記』新羅本紀からも確認できる。七二一年（新羅聖德王二〇）には「徴¹⁷何瑟羅道丁夫二千、築¹⁸長城於北境」とあるように、渤海との国境に長城を築いた。また翌七二二年（聖德王二一）には「築¹⁹毛伐郡城、以遮²⁰日本賊路」、七三一年（聖德王三〇）には「日本国兵船三百艘、越²¹海襲²²我東辺、王命²³将出²⁴兵、大破²⁵之」とあり、新羅は渤海を警戒するだけでなく日本の襲来をも危惧していた。こうした背景から、渤海と日本が共謀して新羅に侵攻する危険を避けるため、新羅が日本との関係を良好に保とうとしていた可能性は十分に

考えられる。

しかしながら前述したとおり、天平六年新羅使がもたらした「王城国」事件ののち、日本と新羅の間では摩擦が増加していく。

天平六年（七三四）時点では、新羅と渤海の緊張関係は収束するどころか、むしろ緊張の一途を辿っていた。七三二年から七三五年までは唐・渤海戦争が勃発しており、新羅も唐に協力して対渤海戦を展開していたためである。次に挙げるのは新羅の出兵とその後の経過を示す史料である。

■『資治通鑑』玄宗 開元二年（七三三）正月庚申条

庚申、命^二太僕員外卿金思蘭^一使^三于新羅、發^レ兵擊^三其南鄙^一。会^二大雪^一、丈余、山路阻隘、士卒死者過半、無^レ功而還。武藝怨^二門藝^一不^レ已、密遣^レ客刺^三門藝於天津橋南^一、不^レ死。上命^三河南^一搜^三捕賊党^一、尽殺^レ之。

この記事の年次比定について古畑氏は、七三三年正月庚申とは金思蘭に渤海征討命令が下された日であり、実際に交戦がなされたのは同年冬であったとする²¹。新羅と渤海の交戦は『資治通鑑』のほか『三国史記』『冊府元龜』にも記録されているが、新羅は風雪に阻まれて苦戦し、撤退を余儀なくされた²²とある。新羅は再度の出兵を唐に請願し、七三四年七月には唐から攻撃命令の勅書を受け取った²³が、その後新羅と渤海は再び戦火を交えることなく、七三五年に唐・渤海戦争は終結した²⁴。新羅は戦功の褒章として涇江（現在の大同江）以南の地域を唐からに割譲され²⁵、本格的に北進政策を展開するようになる²⁶。渤海は七三六年から唐への朝貢を再開し、北方地域で突厥が契丹・奚への侵攻を計画した際には唐にその情報を密告するなど、急速に唐との和親を深めていった。こうして七三五年の戦争終結以降、唐・新羅・渤海の三国関係は新たな局面に突入していく。

さて、こうした唐・新羅・渤海間の情勢から天平六年すなわち七三四年という時期を見てみると、新羅使が本国を出発した時点では唐・渤海戦争の戦況はいまだ予断を許さないものであった²⁸。したがって唐・渤海戦争の収束が引き金となっ

天平六年新羅使の「王城国」事件が起きたとは断定しがたい。唐・渤海戦争以外の何らかの要因が七三四年時点で好転したからこそ、新羅は日本への態度を翻すことが可能になったはずである。

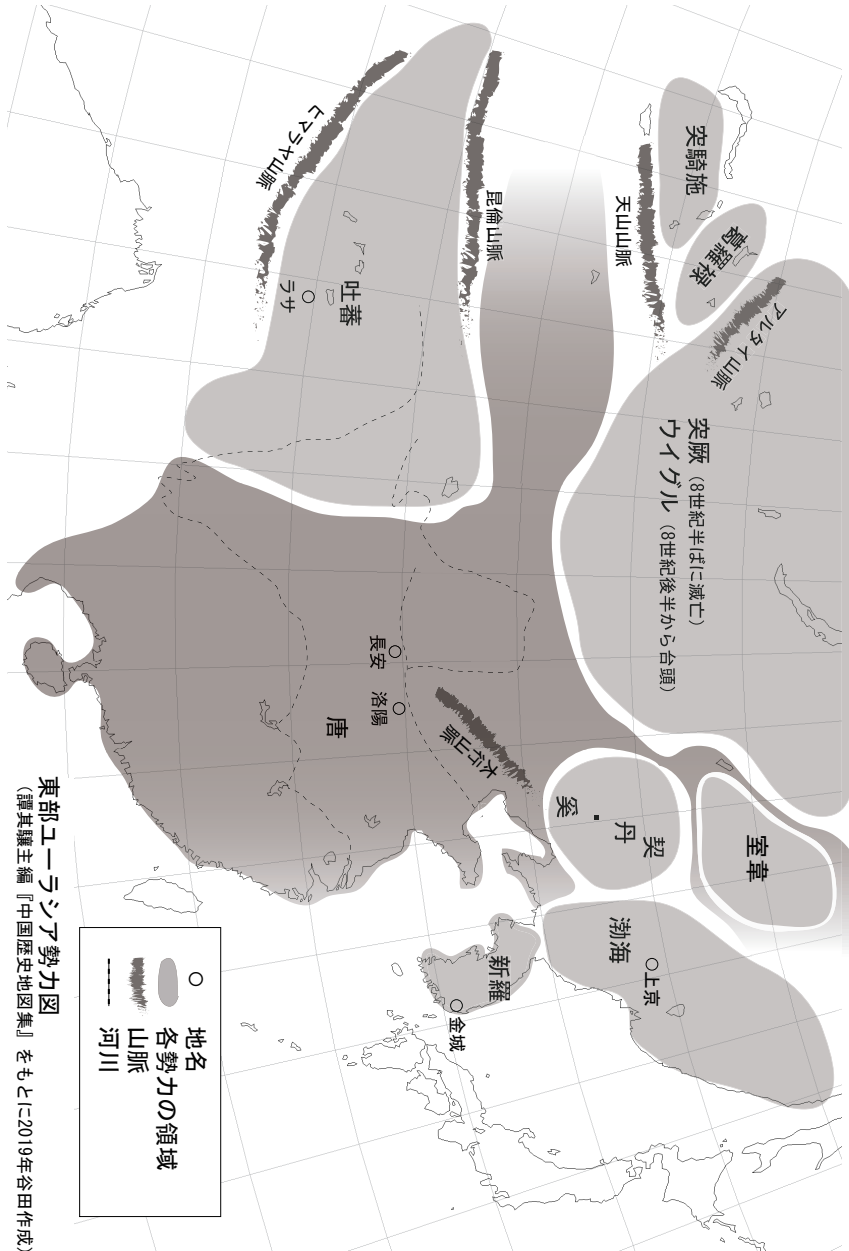
二 国際情勢からの視点

(一) 「東部ユーラシア」から見る日羅関係

ここからは、はじめに述べたように東部ユーラシアの広域的な視点から改めて当時の日本と新羅の関係を再考していく。先行研究では、唐・渤海・新羅・日本といった東アジア諸国家間の外交上の繋がりにについては考察が深められてきたが、突厥や契丹などの周辺勢力の動向が日羅関係にどのような影響を及ぼしたのかという点についてはほとんど言及されていない。

しかし菅沼氏の指摘するように、八世紀後半の安史の乱に至る前、唐にとつての外交上の脅威は北方の突厥と西方の吐蕃であり、唐は常に両方面の情勢を注視しながら、一方と和睦しながら一方へ軍備を集中させるなどの戦略を駆使して、自国の勢力拡張と防衛のバランスを取っていた。²⁹⁾ また新羅も唐・渤海戦争で唐を援護するなど、唐の外交政策と密接に結びつくことで朝鮮半島における勢力拡張を図っていた。このことから、日羅関係と東部ユーラシア情勢とは間接的に連関していた可能性が想定できる。

そこで本章では『資治通鑑』『旧唐書』『新唐書』『冊府元龜』等の史料を根拠として、東部ユーラシア情勢と天平四年・天平六年新羅使の動向とを比較対照していく。なお、八世紀の東部ユーラシア勢力図は次ページのとおりである。



東部ユーラシア勢力図
 (譚其驥主編『中国歴史地図集』をもとに2019年谷田作成)

(二) 天平四年および天平六年新羅使についての再考

(ア) 天平四年新羅使について — 北方の動揺と「年期奏請」 —

天平四年新羅使到来の直前期から遡って東部ユーラシア情勢を見ていくと、七三〇年(天平二年、唐暦では玄宗の開元一八年、新羅では聖德王二九年)は西方で戦争が終わり、それと同時に北方で戦争が始まるという、国際情勢の転換点となる年であった。『資治通鑑』には以下のように載っている。

■『資治通鑑』玄宗 開元一八年(七三〇) 五月条

吐蕃遣使致書於境上求和。

初、契丹王李邵固遣可突干入貢、同平章事李元紘不礼焉。左丞相張說謂人曰、「奚・契丹必叛。可突干狡而很、專其国政久矣、人心附之。今失其心、必不來矣。」

己酉、可突干弑邵固、帥其国人并脅奚衆叛降突厥、奚王李魯蘇及其妻韋氏・邵固妻陳氏皆來奔。制幽州長史趙含章討之、又命中書舍人裴寬・給事中薛侃等於関内・河東・河南・北分道募勇士。

七三〇年五月、西方では唐と吐蕃が休戦和睦し、会盟に向けた交渉を開始した。それと同時期に北方の契丹では内乱が発生し、契丹王を殺害した可突干が国人を率いて突厥に帰順した。そこで唐は内乱を鎮圧するために契丹に出兵する。

そのうち唐は数年にわたって対契丹戦に兵力を傾けた。七三二年(開元二〇年)正月から三月にかけては契丹・奚との交戦が繰り返されたが、戦局は拡大する一方だった。六月にはさらに突厥や室韋が拳兵したほか、九月には渤海が登州へ侵攻し(唐・渤海戦争の勃発)、北方地域全体が戦争状態に突入した。そして前述のとおり、翌七三三年正月に新羅が渤海と交戦する。

このように唐・新羅にとって北方情勢が危険を増している状況下では、新羅は安全保障の観点から日本と良好な関係を保つ必要があった。もしも日本が渤海に協力することがあれば、朝鮮半島における新羅の北進政策の妨げとなるだけでない

く、日本と渤海に挟撃される危険性もあったからである。このため天平四年に新羅は日本へ使節を派遣し、年期奏請を行ったのである。

(イ) 神亀三年(七二六)以来、新羅使が六年間途絶した背景について

ここで少し本論から逸れるが、天平四年新羅使が神亀三年(七二六)以来六年ぶりに来航した使節であったことについて言及したい。なぜ前回から六年もの期間が空いたのかを考察してみると、ここにも東部ユーラシア情勢の変動が起因している。

当時、ビルゲ可汗を君主とする突厥は北方において強盛を誇っており、唐に対して和親と公主降嫁を繰り返し要求していた。しかし唐は突厥が唐への侵攻を企てているのではと疑い、突厥の再三の要求を拒み続けていた。⁽³³⁾ また、西方の于闐(ホータン)が突厥と内通しているとして于闐王を処刑し、突厥との境界付近に兵力を配備するなど、唐と突厥の間の緊張は日ごとに増していた。こうした中で、七二七年にビルゲ可汗は唐に和親を求めて再び遣使した。この時に突厥使が友好のしるしとして持参したのは吐蕃からの密書であった。

■ 『資治通鑑』玄宗 開元一五年(七二七) 九月丙戌条

突厥毗伽可汗遣其大臣梅録啜入貢。吐蕃之寇瓜州也、遣毗伽書、欲與之俱入寇、毗伽并献其書。上嘉之、聽於西受降城為互市、每歲齎縑帛數十萬匹、就市戎馬、以助軍馬、且為監牧之種。由是國馬益壯焉。

この行動を評価して、ついに唐は突厥との和睦を認めた。その後吐蕃は唐へ侵攻を開始したが、突厥が吐蕃側につくことはなかったため唐は西方に兵力を集中することができた。このように唐・突厥の和睦によって北方情勢が安定したことで、安全保障のために日本との関係づくりを進める必要性が低下した。このため神亀三年以後、北方情勢が再び大規模な混乱を迎えるまでの六年間、新羅使の派遣が一時的に途絶えていたのだと推測できる。

(ウ) 天平六年新羅使について ― 北方の安定と「王城国」 ―

続いて天平六年新羅使について検討する。前述のとおり、この新羅使は天平六年(七三四)一二月に到着した。そして翌年二月に入京した際に「王城国」への改号を表明したことが日本の反発を買う。この時期の東部ユーラシア情勢はどのようなものであったのだろうか。

七三〇年から始まった北方での争乱は、七三四年(開元二二年)六月に幽州節度使が契丹を大破したことを皮切りに唐側の優勢に転じていった。³⁶⁾一二月には幽州節度使が契丹王らを処刑し、これをもって唐と契丹の戦いは終結する。³⁷⁾さらには突厥のビルゲ可汗が側近から毒を盛られて死去したことで、急速に北方情勢は鎮静化していった。³⁸⁾その後七三六年からは史料上で北方における交戦記事が激減するため、北方情勢が安定したのは七三六年ごろと推定できる。

さて、新羅使が日本に来航したのは七三四年一二月であり、契丹王の処刑がなされ、また突厥可汗の死を伝える告喪使が唐に到来したのもこの月であった。新羅使がいつ本国を出発し、出発時点で戦況に関してどれだけの情報を入手しており、そして日本到着から入京するまでの二か月間に新たな情報を得る機会があったのかは明らかでない。

しかし仮に新羅使が契丹や突厥の劣勢を察知していなかったとすれば、北方地域全体が争乱状態に陥っている(しかも唐・渤海戦争も継続している)中で新羅はあえて危険を冒して日本を挑発したことになる。やはり新羅が当時の東部ユーラシア情勢の動向を把握した上で日本への対応を決定したと考えるほうが、「王城国」を名乗った動機の整合性や新羅使が派遣された時機的な整合性がとれる。

(エ) 天平九年の遣新羅使について

「王城国」事件後、天平九年(七三七)に新羅から帰国した遣新羅使が「新羅国失_二常礼_一」の旨を奏上し、朝廷では新

羅征討の議論が起きた（第一章（二）参照）。この時期の東部ユーラシア情勢を見てみると、北方情勢が安定するのと入れ替わるように西方で紛争が勃発している。『資治通鑑』に、唐と吐蕃の間で開元会盟が結ばれてから破棄されるまでの経緯が記されている。

■『資治通鑑』玄宗 開元二年（七三七）二月己亥条

河西節度使崔希逸襲吐蕃、破之於青海西。

初、希逸遣使謂吐蕃乞力徐曰、「兩國通交、今為一家、何必更置兵守捉、妨人耕牧。請皆罷之。」乞力徐言「必不欺。然朝廷未必專以辺事相委、万有一姦人交關其間、掩吾不備、悔之何及。」希逸固請、乃刑白狗為盟、各去守備、於是吐蕃罷兵。

時吐蕃西擊勃律、勃律來告急、上命吐蕃罷兵、吐蕃不奉詔、遂破勃律、上甚怒。（中略）（趙）惠琮等至、則矯詔令希逸襲之。希逸不得已、發兵自涼州南入吐蕃二千余里、至青海西、与吐蕃戰、大破之、斬首二千余級、乞力徐脫身走。惠琮・（孫）誨皆受厚賞、自是吐蕃復絶朝貢。

この史料によると、会盟が破棄された発端は吐蕃の勃律への侵攻であった。勃律は唐が羈縻支配下に置いていた西域の小国である。このため唐は吐蕃の侵攻を会盟に背く行為とみなし、吐蕃への攻撃を開始する。すでに北方情勢が安定していたため、唐は西方に兵力を集中することが可能であった。河西節度使の崔希逸が吐蕃を攻撃し、両国は戦争状態に突入した。

一方で北方情勢は安定していたため、新羅は天平四年に引き続いて日本に対して強気な外交姿勢を見せることができた。なおかつ新羅は聖徳王の死去にもなつて孝成王が即位し、唐から冊封を受けたばかりであった。³⁹日本に対して強気な外交姿勢をとることで新王の存在感を国内外に示そうとした可能性も考えられる。

(オ) 小結

以上、第二章では天平新羅使と東部ユーラシア情勢との連関性について論証した。本章の要旨は以下の二点である。

① 天平四年新羅使について

七三〇年の契丹内乱を皮切りに、突厥・奚・渤海などの北方勢力が次々と唐と開戦した。新羅は北方地域における孤立の危険を回避するためにも、また渤海に対して兵力を集中させるためにも、日本と親交を結ぶ必要があった。そのため七三二年に新羅は六年ぶりに日本へ遣使し、年期奏請を行った。

② 天平六年新羅使について

七三四年には突厥・契丹に対して唐が優勢となり、北方地域の情勢は安定する。そのため新羅は日本との親交に腐心する必要がなくなり、「王城国」と名乗って新羅が日本に従属する立場でないことを示した。その後も北方情勢は安定していたため、七三四年以降は新羅と日本との対立が増加した。

三 東部ユーラシア情勢と日羅関係の比較 — 一六九〇年代から七六〇年代まで —

第二章までは、天平年間の前後にかけての日羅関係が東部ユーラシア情勢との連関性を有していたという仮説に基づいて論証してきた。第三章では、より長期的な時代範囲においてもこの仮説が成立するかどうかを検証していく。

対象として抽出する時代範囲は、渤海が建国する六九〇年後半から安史の乱が収束する七六〇年代前半までの約一世紀である。この時代範囲の特徴は、ひとつは新羅と渤海の対立関係が存在していたという点、もうひとつは唐が東部ユーラシアにおいて一定の影響力を有していたという点であり、このふたつの特徴は天平新羅使の時期とも共通している。天平年間と類似性のある時代範囲内での比較検討を行い、日羅関係と東部ユーラシア情勢との間に継続的な連関性が見出せる

かを確認し、本稿の締めくくりとする。また紙幅の関係上、本文中に史料を引用することは避け、典拠は適宜文末註に記載する。

(一) 六九〇年代後半 渤海建国

渤海は六九八年に、はじめ振(震)国として樹立した。

この時期の日羅関係はおおむね良好である。新羅使は二〜三年おきに来航しており、渤海建国に関係づけられるような特別の変化は見られない。この前後で唯一トラブルが起きたのは持統三年(六八九)で、天武天皇崩御の弔問のため来航した新羅使の身分が低いことや、前年に日本から新羅へ告喪使を派遣した際の新羅側の応対が軽微であったことが問題視されている⁽⁴⁰⁾。

東部ユーラシア情勢から見ると、この時期の各地の勢力図ははまだ流動的であり、新たな勢力の台頭や支配権を巡る交戦が繰り返されていた。こうした各勢力の自立と連繋への動きについては菅沼氏が論述している⁽⁴¹⁾。六九〇年代後半において、唐は西方の吐蕃との戦争のほか、並行して北方の突厥・契丹とも交戦していた。また、新羅と唐は朝鮮半島の支配を巡って緊張関係にあった。こうした不安定な情勢下であったため、新羅にとっては日本との親交を維持するのが得策であった。

(二) 七〇〇年代〜七二〇年代 突厥と吐蕃の台頭

日羅関係の対立は、新羅使や遣新羅使の交流の上では見られない。ただし『三国史記』によると七二〇年代以降、新羅は渤海や日本を警戒して長城や毛伐城を築いており、水面下では日羅関係が冷却化していることがうかがえる。

この時期の東部ユーラシア情勢は前半と後半に分けられる。まず前半期の七〇〇年代は、西北二方面で唐と吐蕃・突厥との戦争が勃発しており、唐にとっては兵力を二方面に割かねばならない苦しい戦局であった。しかし後半期の七一〇年

代々七二〇年代半ばになると、唐と吐蕃が七〇六年（唐暦では中宗の神龍二年）に和睦したことをきっかけに、唐は対突厥戦争に兵力を集中していった。⁴⁴ この結果、唐・突厥戦争は徐々に収束に向かい、最終的に七二七年（玄宗の開元一五年）に唐と突厥は和睦する。⁴⁵

北方情勢が安定化するにつれて新羅が日本に接近する必要性は薄れていった。しかしながら七二七年から日本と渤海が通航を開始したため、このことが新羅の新たな懸念を引き起こした。日本と渤海が結託して朝鮮半島の支配を脅かす可能性を感じ取った新羅は、表面上は従来どおり新羅使を派遣しながら、水面下で毛伐城の築城などの備えを進めたのである。

(三) 七三〇年代 北方勢力の興隆と天平新羅使

第二章で詳述したとおりである。

(四) 七四〇年代～七五〇年代前半 突厥の滅亡

天平六年の「王城国」事件以後、新羅使の来航頻度はやや低下して三～四年程度となる。ただしこれは三年に一度の年期を守ったものである可能性があり、日羅関係の悪化を示す事象とは言いがたい。

しかし明瞭な対立も起きている。天平一五年（七四三）に新羅使が違例を責められる事例が起きると、そのうち来航頻度は著しく低下し、次の来航は天平勝宝四年（七五二）⁴⁷、その次は天平宝字四年（七六〇）の来朝となるなど、⁴⁸ 日羅間の外交には大きな空白期間が生まれるようになる。また、天平勝宝四年の新羅使来航時に日本は「国王自ら来朝しない場合には必ず表文を持参せよ」と要求している。

この時期の北方地域では、七四一年（開元二十九年）にビルゲ可汗が暗殺されたのを機に、突厥が内乱状態に突入する。

唐はウイグルや葛邏祿（カルルク）などの突厥の傘下にあった諸部族を扇動して突厥を攻撃させ、突厥の弱体化を加速させた。七四四年（天宝三年）に突厥最後の可汗が殺害されると、ウイグルの骨力裴羅（フトルク・ボイラ）が独立して可汗となり、突厥はついに滅亡した。⁵⁰

突厥が滅亡したことで北方地域には強盛を誇る存在がなくなり、一時的な平和状態が生み出された。このことが日本と新羅の疎遠化を加速させた一因であろう。またもうひとつの要因としては、日本と渤海の交流が非常に緩やかであったことも挙げられる。神龜四年（七二七）に第一次渤海使が来航して以来、第二回は天平十一年（七三九）、第三回は天平勝宝四年（七五二）と、国交開始当初の日本と渤海は一二―一三年おきに交流する程度であった。こうした状況が、日本と渤海が結託するのではという新羅の不安を払拭したのである。

（五）七五五年～七六三年 安史の乱勃発

七五五年に勃発した安史の乱は、ウイグルの協力を得て七六三年に鎮圧するまで、八年にわたって唐を揺るがした大乱である。

日本は乱についての情報を渤海との国交によって入手し、この期に乗じた新羅征討を計画した。⁵¹ また天平宝字四年（七六〇）来朝の新羅使に「来朝の四条件」を通告するなど、新羅に対して強硬姿勢を示している。⁵² 新羅使はその後も天平宝字七年（七六三）、天平宝字八年（七六四）に連続して来航するが、違例を詰問される事例が相次いだ結果、宝龜一〇年（七七九）の新羅使来航を最後に日本と新羅の使節交流は終焉する。

これまでの時期においては、北方地域の情勢が安定している場合ほど日羅関係は冷却化し、情勢が不安定な場合ほど緊密になる傾向があった。ただし安史の乱勃発後はこうした傾向が見られなくなる。安史の乱の時期は北方情勢が大いに混乱しているにも関わらず日羅関係は険悪なままであり、この原因としては、これまでの度重なる対立の中で二国間の関係

がすでに冷え切っており、互いに協力して危機を乗り切ろうとする機運が乏しかったことが想定できる。

結びにかえて

本稿では、日本と新羅の外交関係の推移が、東部ユーラシア情勢、とりわけ隣接する北方地域の情勢の変化と結びつけて説明できることを論証した。具体的な要旨は以下のとおりである。

- (1) 天平年間の日羅関係は、北方情勢の混乱ないし安定にもなつて変化した。北方情勢が安定している時期には日羅関係は冷却化し、北方情勢が混乱している時期には日羅関係は友好化する。
- (2) 天平年間に、唐は北方・西方と交互に和親を結ぶことで二正面戦争を避けようとしていた。短期間で日羅関係が対立と融和を繰り返した背景には、こうした唐の外交政策が関わっていた。
- (3) 天平年間だけでなく、他の時期においても日羅関係と東部ユーラシア情勢の連関性が認められる。ただし安史の乱の時期には、北方情勢が混乱しているにも関わらず日羅関係は好転しない。

なお、本稿は国際情勢や外交使節の交流に主眼を置いて論述しており、日本や新羅の内政については踏み込んだ検討ができていない。たとえば『三国史記』によると七四〇年代から七五〇年代にかけて新羅は断続的に飢饉や疫病に見舞われており、こうした内憂が新羅使の来航頻度低下の一因になっていた可能性は否定できない。古代の日本を取り巻く東部ユーラシア世界は無数の連関性が絡み合つて形成されていたはずである。本稿で扱った約一世紀にわたる日羅外交の推移については、より複合的な視点から再考することでさらに明瞭な解釈を得られる余地がある。それについては今後の課題

としたい。

註

(1) 西嶋定生が提唱した「東アジア世界」論については以下を参照。西嶋定生「東アジア世界と冊封体制―六・八世紀の東アジア―」『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版、一九八三年、初出一九六二年。同「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』、初出一九七〇年。同「東アジア世界の形成と展開」『西嶋定生東アジア史論集三 東アジア世界と冊封体制』岩波書店、二〇〇二年、初出一九七三年。

(2) 古畑徹「唐渤海戦争の展開と国際情勢」『集刊東洋学』五五、一九八六年。

(3) 菅沼愛語『7世紀から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移―唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に―』溪水社、二〇一三年。

(4) 「東部ユーラシア」については以下を参照。廣瀬憲雄「倭国・日本史と東部ユーラシア―六・十三世紀における政治的連関再考―」『歴史学研究』八七二、二〇一〇年。同「古代東アジア地域対外関係の研究動向」『東アジアの国際秩序と古代日本』吉川弘文館、二〇一一年。なお廣瀬氏は東部ユーラシアの地域範囲の西限をパミール高原以東

までとしている。

(5) 坂本太郎『日本全史2 古代I』東京大学出版会、一九六〇年、二二六頁。

(6) 濱田耕策「中代・下代の内政と対日本外交―外交形式と交易をめぐる―」『新羅国史の研究―東アジア史の視点から―』吉川弘文館、二〇〇二年、初出一九八三年、三二二―三三六頁・三四八―三四九頁。なお濱田氏は「日本と新羅・渤海」(荒野泰典他編『律令国家と東アジア』吉川弘文館、二〇一一年、一〇七頁)でより明確に見解を述べており、年期奏請は日本と対等の立場で国交を行おうとする新羅側の意思表明であり、このため日本も「三年一度」の礼式を採り、それに応じたとしている。

(7) 鈴木靖民「天平初期の対新羅関係」『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、一九八五年、初出一九六八年、一六五―一七四頁。石井正敏「光仁・桓武朝の日本と渤海」『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、二〇〇一年、初出一九九五年、四七九頁。森公章「日渤海関係における年定期の成立とその意義」『遣唐使と古代日本の対外関係』吉川弘文館、二〇〇八年、初出二〇〇四年、一八〇―一八七頁。

- (8) 「朝聘」の用例は六国史内では新羅・渤海など国外からの使者に対して用いられており、蝦夷や倭人など国内の服属民には用いられていない。『日本書紀』雄略天皇九年(四六五)三月条、『続日本紀』神龜四年(七二七)二月丙申条、天平宝字四年(七六〇)九月癸卯条、宝龜八年(七七七)五月癸酉条、『続日本後紀』承和三年(八三六)二月丁酉条など。
- (9) 前掲註(7)石井論文「光仁・桓武朝の日本と渤海」二〇〇一年、四八〇～四八三頁。
- (10) 河内春人「遣唐使の派遣動機」『東アジア交流史のなかの遣唐使』汲古書院、二〇一三年、三四～四二頁。
- (11) 『続日本紀』天平八年二月戊寅(二八日)任命、四月丙寅(二七日)拝朝。また帰国記事は天平九年正月辛丑(二六日)条にある。
- (12) 『続日本紀』天平九年二月丙寅(二二日)条。
- (13) 『続日本紀』天平九年四月乙巳朔条。
- (14) 酒寄雅志「華夷思想の諸相」『渤海と古代の日本』校倉書房、二〇〇一年、初出一九九二年。
- (15) 前掲註(7)参照。鈴木靖民氏および石井正敏氏は対渤海という安全保障の面を指摘し、森公章氏は新羅国内の文物充実にともなう交易の需要増加を指摘している。
- (16) 『新唐書』卷二一九渤海伝。
- (17) 古畑徹「大門芸の亡命年時について―唐渤紛争に至る渤海の情勢―」『集刊東洋学』五一、一九八四年、二八～

二九頁。

- (18) 李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討―」『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、一九九八年、初出一九九一年。
- (19) 『三国史記』新羅本紀聖德王二〇年(七二二)七月条。
- (20) 『三国史記』新羅本紀聖德王二一年(七二二)一〇月条、聖德王三〇年(七三一)四月条。
- (21) 前掲註(2)古畑論文「唐渤海戦争の展開と国際情勢」一九八六年。
- (22) 『三国史記』新羅本紀聖德王三二年(七三三)七月条など。
- (23) 『冊府元龜』卷九七三外臣部助国討伐開元二二年(七三四)二月条、『三国史記』新羅本紀・聖德王三三年(七三四)正月条など。
- (24) 古畑徹「張九齡作「勅渤海王大武藝書」と唐渤紛争の終結―第二・三・四首の作成年時を中心として―」『東北大学東洋史論集』三、一九八八年。
- (25) 『三国史記』新羅本紀聖德王三三四年(七三五)二月条、聖德王三五年(七三六)六月条。
- (26) 酒寄雅志「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢―渤海との関係を中心として―」『渤海と古代の日本』校倉書房、二〇〇一年、初出一九七七年、二〇四～二〇七頁。

(27) 石井正敏「対日外交開始前後の渤海情勢」『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、二〇〇一年、初出一九八四年、三一〜三一八頁。

(28) 新羅使が本国を出発した時期は不明である。しかし『続日本紀』によると大宰府が新羅使来着を朝廷に奏上したのが天平六年(七三四)一二月癸巳(六日)であるため、遅くとも同年一月には本国を出発していると推測する。いまだ唐・渤海戦争が膠着している時期である。

(29) 前掲註(3) 書所収論文、菅沼愛語「8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢―多様な外交関係の形成とその展開―」初出二〇一〇年、「安史の乱以前の2つの唐・吐蕃会盟―神龍会盟と開元会盟―」初出二〇一〇年。

(30) 『資治通鑑』開元二〇年正月乙卯条、二月条。『旧唐書』卷八玄宗開元二〇年春正月乙卯条、二月己未条、三月条。『新唐書』卷五玄宗開元二〇年正月乙卯条、三月己巳条。

(31) 『資治通鑑』開元二〇年六月丁丑条。

(32) 『資治通鑑』開元二〇年九月条。『旧唐書』卷一九九下渤海靺鞨伝。『新唐書』卷八玄宗開元二〇年九月乙巳条、卷二二〇渤海伝。

(33) 『資治通鑑』開元二二年七月条、八月丙申条、開元一三年四月条、開元一三年一二月乙巳条。

(34) 『資治通鑑』開元一三年是歲条。

(35) 『資治通鑑』開元一四年正月辛丑条。

(36) 『資治通鑑』開元二二年六月壬辰条。

(37) 『資治通鑑』開元二二年一二月乙巳条。『旧唐書』卷八玄宗同日条、『新唐書』卷五玄宗同日条。

(38) 『資治通鑑』開元二二年一二月条、『旧唐書』卷八玄宗同年是歲条。

(39) 『資治通鑑』開元二五年二月乙酉条、『旧唐書』卷九玄宗同年二月癸酉条、『新唐書』卷五玄宗同年三月乙酉条。

(40) 『日本書紀』持統三年(六八九)五月甲戌条。

(41) 前掲註(3) 書所収論文、菅沼愛語「7世紀後半の東部ユーラシア諸国の自立への動き―「唐・吐蕃戦争」と新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性―」初出二〇〇九年。

(42) 『三国史記』新羅本紀 聖德王二〇年(七二一)七月条、聖德王二一年(七二二)十月条、三〇年(七三二)四月条『三国史記』新羅本紀。

(43) 『新唐書』卷二一六 吐蕃伝。『冊府元龜』卷九八一 外臣部 盟誓 開元二年五月条。

(44) 七〇六年(神龍二)以後も唐と吐蕃の交戦は続いたが、その一方で七一四年(開元二)や七一九年(開元七)には結果的に決裂はしたものの会盟交渉がなされている。菅沼氏はこの時期の唐の外交戦略について、和戦両様の対応で吐蕃を牽制しつつ、北方では突厥包圍作戦を進めていたと指摘している。(前掲註(29) 菅沼論文「8世紀前半

の東部ユーラシアの国際情勢―多様な外交関係の形成とその展開―二〇一三年、六八―七五頁。

(45) 『資治通鑑』玄宗 開元一五年(七二七) 九月丙戌条。

(46) 『続日本紀』天平一五年(七四三) 四月甲午(二五日) 条。

(47) 『続日本紀』天平勝宝四年(七五二) 九月丁卯(二四日) 条、天平勝宝五年(七五三) 六月丁丑(八日) 条。

(48) 『続日本紀』天平宝字四年(七六〇) 九月癸卯(二六日) 条。

(49) 『資治通鑑』玄宗 開元二九年(七四一) 七月癸酉条、天宝元年(七四二) 八月丁丑条など。

(50) 『資治通鑑』玄宗 天宝三年(七四四) 八月条。

(51) 『続日本紀』天平宝字二年(七五八) 一二月戊申(一〇日) 条。

(52) ただし河内春人氏によると、当初の「新羅征討計画」は新羅への威嚇効果を狙う程度のものであり、実際に本格的な攻撃準備が開始されるのは七六〇年以降である。(河内春人「東アジアにおける安史の乱の影響と新羅征討計画」『日本歴史』五六一、一九九五年、二六―二八頁)。

(53) 来朝の四条件とは、①応対に責任のとれる立場の者を使者とすること(専対の人)、②礼にかなっていること(忠信の礼)、③旧例どおりの献上品を持参すること(仍旧の調)、④ふさわしい明瞭な言質があること(明瞭の言)であった(『続日本紀』天平宝字四年(七六〇) 九月癸卯

(二六日) 条)。

(54) 『続日本紀』天平宝字七年(七六三) 二月癸未(一〇日) 条、宝龜元年(七七〇) 三月丁卯(四日) 条、宝龜五年(七七四) 癸卯(四日) 条。

(院第四六回生)